農家民宿に対する意識調査

－仙台市民と岩手県浄法寺町・花泉町農家への調査－

Survey of the attitude to the accommodation on the farm

- In case of residents of Sendai-city and farmers of Johoji-town and Hanaizumi-town -

去石真佐子* 藤崎浩幸**

SARUISHI, Masako* FUJISAKI, Hiroyuki**

(財)日本グラウンドワーク協会* 岩手大学農学部**

JAPAN GROUNDWORK Assoc.* Fac. of Agr. IWATE Univ.**

I はじめに

グリーンツーリズムと呼ばれる農村に滞在して過ごす観光が、近年、日本でも注目されている。これは、1950年代から主に欧州で発達してきたもので、都市住民のふるさと志向の高まりを背景に、農村活性化の一手段として期待されている。この中心となるのが農家が兼業として経営する「農家民宿」である。

欧州の農家民宿については山崎¹⁾が英仏独のグリーンツーリズムを紹介する一環で取り上げていたり、英国の農家民宿を竹本²⁾が分析していたり、その他見聞記まで含めると様々なものがある。一方日本の農家民宿についての主要な研究は山崎¹⁾のものと大江^{3) 4)}のものである。山崎は、日本のグリーンツーリズムの状況をコンパクトにまとめており、都市住民のグリーンツーリズムへの関心については、その7割が農村に旅行し主に温泉・観光・レクリエーション目的であること、5割が2食付き民宿を希望していることや、既存民宿経営者の調査から、改善要望の多い施設として「娯楽施設」「部屋」「トイレ・風呂」がともに3割強と多く、将来の民宿イメージでは「田舎のよさを活かす」が1位で4分の1が志向し、「キッチン付きの部屋で利用者が自炊できる民宿」への賛同者は2割に満たないこと、などを紹介している。大江は観念的な考察と、一部イタリアの農家民宿と広島県の農家が経営するスキー民宿との調査を

通じて、水田と草地という農業形態の違いから日本では農村景観のみでは集客できず他の観光資源を活用せざるを得ない現状にあること、ベッドと布団という生活様式の違いから日本では収容能力がある弾力的であるもののプライバシー保護に難点があること、日本では長期連続休暇が一般化していないこと、農家がビジネス感覚に欠けていること、農村部の小規模宿泊施設に対する優遇政策がないことを指摘し、ビジネス感覚を有する農業経営者の育成、個室化への対応、優遇政策の導入、グリーンツーリズム支援組織育成を提言している。

本研究は、利用者側の都市住民と提供者側の農家との農家民宿に関心のない者を含んだ意識調査を通じて、従来の成果を検証し、日本で農家民宿が定着する可能性があるのか、またその場合どのような形態となるのかを把握するものである。

II 調査方法

利用者側の調査対象には東北一の大都市である仙台市のN T T電話帳から300世帯を無作為抽出し、1世帯に2枚の調査用紙を配布し、年齢・性別の異なる2名の回答を依頼した。その結果、124世帯（配布世帯の43%）から211件の有効回答が得られた。

利用者側回答者の性別は男性53%、女性46%

図1. 仙台市民の農家民宿利用への期待

図2. 仙台市民の農家民宿利用への不安

とほぼ半数ずつで、年齢は50歳代が26%と最も多いが、30歳代13%、40歳代18%、60歳代17%、70歳代18%で、職業は会社員が31%と最も多く、次いで無職18%、家事従事者14%、自営業9%、臨時雇・パート9%の順で、特定の性別、年齢や職業に偏っていない。

農家側の調査対象は、大きな観光地に隣接しておらず、調査時点でグリーンツーリズムの展開が期待できる市町村として、岩手県内から畑作・畜産地帯の浄法寺町と水田地帯の花泉町とを選定し、両町とも役場の選定した、農業経営に主軸を置いている農家を調査対象とした。また各農家に1枚の調査用紙を送付し、世帯の意見として回答を求めた。有効回答は浄法寺町252戸のうち77戸(31%)、花泉町140戸のうち65戸(46%)から得られた。浄法寺町の農家はタバコ・稲作経営が53%と最も多く、平均家族数は4.8人、うち農業従事者は3.1人であり、

花泉町の農家は稲作・畜産経営が38%と多く、家族数5.2人、うち農業従事者3.0人である。

なお、いずれの調査とも配布・回収は郵送で、利用者側調査は1997年12月上旬、農家側調査は1997年12月下旬に実施した。また、調査用紙とは別に欧州の自炊式や1泊朝食(B&B、Bed and Breakfast)式農家民宿についての簡単な説明紙を付した。

III 利用者側意識

まず、回答者の宿泊を伴う国内旅行(帰省等は含み、業務等は除く)について、1年間に平均2.3回、1回あたり平均1.6泊していて、旅行回数の多い人の方が1回あたりの宿泊数も多い傾向がややうかがえる。同行者は「家族」が6割と最も多く、利用する交通機関は、「自動

車」56%、「公共交通機関」42%である。旅行の主な目的（複数回答）は、「温泉等で休養」が54%と多く、次いで「観光・見物」が46%である。よく利用する宿泊施設（複数回答）は「観光旅館・ホテル」が59%、次いで「都市ホテル」40%で、第3位は「民宿・ペンション」がやや離れた16%となっている。その際の平均宿泊料金は、「観光旅館・ホテル」の14,100円に対し、「民宿・ペンション」は7,300円と約半分の水準である。そして宿泊先を選ぶ基準（複数回答）は多い順に、「料金」56%、「目的地への便利さ」43%、「食事」32%、「施設の状況」29%という具合である。

次に農家民宿への期待の程度を5段階で質問した。この結果が図1である。「新鮮な食べ物」を期待する回答が「やや期待する」も加えて8割に達し最も高く、逆に期待が最も低いのが「農村体験」で「期待しない」が2割である。

図2は農家民宿への不安について、その程度を5段階で質問したものである。不安が強いのは「トイレ・風呂の設備」と「虫が多い」ことで、3割の回答者が「不安がある」と回答した。

そして、民宿の施設・運営形態に関して、まず客室についてである。一般に農家住宅では、隣室とが襖や障子で仕切られている開放型の部屋である。特に旧家などの立派な大黒柱や梁を含めて和風建築を味わうにはこの方が望ましいのだが、部屋が壁で仕切られている個室型の部屋に比べてプライバシー保護などの点で問題となる可能性がある。今回の調査では、表1のように「開放型を好む」が2割、「どちらでもよい」3割に対し、「個室型を好む」が4割とやや多くなっている。

表1. 農家民宿に望む部屋の形態

部屋の形態	件数	比率
開放型	49	23
個室型	80	38
こだわらない	67	32
無回答	15	7

また、食事提供について、日本では民宿でも1泊2食提供が一般的であるが、欧州では自炊

式や1泊と簡単な朝食のみ提供するB&B式の農家民宿が多い。表2は、食事提供しない農家民宿について示したもので、「近くに食事場所があれば構わない」41%、「行程によっては構わない」20%に対し、「利用したくない」が31%である。自炊施設付きの農家民宿についても表3に示したが、「利用したい」は1割に満たなかった。

表2. 食事を提供しない農家民宿の利用

利用意向	件数	比率
近くに食事場所があればよい	87	41
行程によっては構わない	43	20
利用したくない	66	31
無回答	15	7

最後に、農家民宿への宿泊希望について表4に示した。「泊ってみたい」という回答は15%とあまり多くないとはいえ、農家民宿への宿泊を希望する回答者が存在した。そして「行程によっては泊ってみたい」が62%であり、周辺の観光地等との足場としての利用が見込まれる。

表3. 自炊型農家民宿の利用

利用意向	件数	比率
利用したい	20	9
たまにはいい	91	43
利用したくない	86	41
無回答	14	7

表4. 農家民宿への宿泊希望

宿泊希望	件数	比率
泊ってみたい	31	15
行程によっては泊ってみたい	133	63
利用したくない	29	14
その他	8	4
無回答	10	5

IV 農家側意識

回答者のグリーンツーリズムに対する認識に関して、「グリーンツーリズム」や「農家民宿」という言葉を聞いたことがある回答者は浄法寺町45%、花泉町72%で、これに関した講習会等に参加したことがある回答者は浄法寺町1%、花泉町22%である。花泉町は岩手県グリーンツ

ーリズム推進協議会のモデル整備構想策定地域のひとつで平成9年に「花泉町グリーンツーリズム推進協議会」が設立されていることから農家に認識が広まっているといえる。

まず、仮に農家民宿を経営するとした場合の形態に関していろいろ質問した。

表5が客室についての結果では「空き部屋をそのまま使用」が両町とも最も多く、浄法寺町で31%、花泉町43%であった。

洗面所、風呂、トイレの衛生施設について示したのが表6で、浄法寺町では「客用に新設」が40%と最も多く、次いで家族用をそのまま使用」が31%であった。花泉町では「家族用をそのまま使用」33%と一番多く、次いで「家族用を改良」が28%である。

表5. 客室の提供方法

提供方法	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
別棟を新築	10	15	14	18
改築	7	11	15	19
改装	12	18	18	23
そのまま利用	28	43	23	30
その他	1	2	0	0
無回答	7	11	7	9

表6. 風呂・トイレ等の提供方法

提供方法	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
宿泊者用を新設	16	25	30	39
家族用を改良	18	28	17	22
家族用をそのまま利用	22	34	24	31
その他	1	2	1	1
無回答	8	12	5	6

表7が食事の提供についてである。浄法寺町で「食事提供なし」40%、「1泊2食提供」36%、「1泊朝食提供」13%に対し、花泉町で「1泊2食提供」57%、「食事提供なし」20%、「1泊朝食提供」12%と対照的である。

農作業体験の提供についてを表したのが表8である。「自分で提供」するが浄法寺町で42%、花泉町では「自分で提供」53%と比較的積極的である。

表7. 食事の提供

提供の形態	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
2食提供	37	57	28	36
朝食のみ提供	7	11	31	40
食事提供なし	13	20	10	13
無回答	8	12	8	10

表8. 農作業体験の提供

提供の形態	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
自分で提供	35	54	32	42
近隣に協力を要請 /近隣の情報提供	9	14	15	19
何もしない	11	17	23	30
その他	3	5	1	1
無回答	7	11	6	8

民宿経営への期待を、収入面で示したのが表9である。浄法寺町、花泉町ともに「家計へのゆとり」、「部屋の有効活用（収入は期待しない）」に対し、「複合経営の一つ」と考える割合は15%以下とあまり期待されていない。一方、表10は客との交流への期待であるが「とても期待する」、「やや期待する」を合わせると両町ともに約70%前後と期待度が高いことが伺える。

表9. 農家民宿の収入面への期待

期待の方向	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
複合経営の1つとして	9	14	9	12
家計にゆとりをもつ	25	38	32	42
利益は望まない	19	29	23	30
その他	3	5	5	6
無回答	9	14	8	10

表10. 農家民宿の客との交流への期待

期待の度合い	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
とても期待する	20	31	10	13
やや期待する	30	46	42	55
あまり期待しない	7	11	19	25
無回答	8	12	6	8

開業に際しての障害を3段階で質問したのが図3である。浄法寺町では「利用客が見込めない」と「強く思う」回答者が62%、「やり方がわからない」で57%、「まとまった資金が必要」

図3. 農家が民宿開業に対して障害に感じる事

図4. 民宿経営意欲と民宿開業に対して障害に感じる事

では47%と障害に感じており、花泉町でもこの3項目はいずれも4割が「強く思う」と回答している。次いで「手続きが面倒」が続き、資金・制度面等が障害になっている。逆に、「他人がいるが嫌」「客との対応が苦手」の心理面では「あまり思わない」が浄法寺町で2,3割、花泉町で4割強とあまり障害になっておらず、「人手がとれない」「掃除(食事提供)が面倒」といった労力面がこの中間に位置する。全般に浄法寺町の方が花泉町よりも障害を強く感じている。

また後述する表12に示す農家の民宿経営意欲で「ぜひやりたい」「やってみてもいい」という者を「意欲あり」、「やる気はない」という者を「意欲なし」として、農家民宿開業に対し障害に感じることを示したのが図4である。人手や食事提供、掃除といった労力面や、客との対応や他人の存在といった心理面では経営意欲のある回答者では意欲ない回答者よりも障害と感じていない傾向があるが、資金・制度面では経営意欲に関係なく障害と感じている。

表11は、民宿経営に関して関係機関に期待することである。「資金援助」、「(民宿経営方法の) 情報提供」、「(研修会等の開催)」、「(町内に客を集めるための)」イベント開催」が両町とも4割前後であった。

表11. 民宿開業に際し期待する支援(複数回答)

支援の方法	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
情報提供	22	34	30	39
資金援助	26	40	31	40
研修会などの開催	28	43	24	31
相談窓口設置	5	8	4	5
イベント開催	23	35	28	36
開業後の宣伝	6	9	7	9

表12. 農家民宿経営意欲

意欲の程度	花泉町		浄法寺町	
	件数	比率	件数	比率
ぜひやりたい	3	5	0	0
やってみてもいい	22	34	14	18
やる気はない	36	55	59	77
無回答	4	6	4	5

最後に、民宿開業について示したのが表12である。「ぜひやりたい」が浄法寺町0%、花泉町5%、「やってみてもいい」は浄法寺町18%、花泉町34%である。

V 農家民宿の展開方向

以上のことから、従来の研究ではやや観念的に指摘されたことが、具体的な意識調査を通じ

て再確認された。

すなわち、農家民宿の利用希望者、農家民宿の開業希望者ともある程度存在することから、日本においても、今後、農家民宿が定着していく可能性のあることが、まずわかる。

また農家民宿の形態としては、①農家の労働力が許せば1泊2食提供が望まれ、素泊まり・自炊式やB&B式の場合は最寄りに食事場所が必要なこと、②資金的余裕がなければ空き部屋を利用した機などで仕切られただけの開放型の客室でもよいが、基本的には壁で仕切られただけの個室型の客室が望ましいこと、③風呂・トイレなどの衛生施設はきちんと整備すること、④当面は客との交流や小遣い稼ぎを目的に取り組むことが望ましいこと、⑤農村体験を主目的とする利用者は多くないので、周辺の観光地等への足場の宿という視点が重要であることが指摘できる。

そして、農家民宿開業方法の情動的今日や資金援助が強く望まれていることがわかった。

参考文献

- 1) 山崎光博ら(1993)「グリーンツーリズム」家の光協会
- 2) 竹本田持(1998)「泊まりある記・英国農家民宿」三嶺書房
- 3) 大江靖男(1995)「日本型農家民宿の展開に関する一考察」、近畿中国研究90
- 4) 大江靖男(1996)「農家民宿の経営を考える」AFF27(7)

The purpose of this paper is to survey the attitude to the accommodation on the farm among residents of Sendai-city, farmers of Johoji-town and Hanaizumi-town.

As the result, there is possibility that the accommodation on the farm is established in Japan. But the various support systems for farmers who want to open the accommodation are required. And some suggestions about how to manage the accommodation on the farm were got.